

この度の松山へのご用命、誠にありがとうございます。

能楽の楽しみ方は多様にあります、松山からの一押しをお伝えしたいと思います。
それは、「演目事の構成を知る事」「移り変わるモノを素直に受け留める事」です。

どんなにゆっくりと感じる時でも舞台には流れがあります。
起承転結、喜怒哀楽、他にも様々な変化が個々の感性を直撃する。
それが芸能で、古典・現代の違いはなく、能楽でも同じです。

演劇を通して、人の心を動かす事、これは演技者の課題です。
私も能を演じる時に、「あとさきの布石」や「狙い所」を探すことを心掛けています。
当日、皆様に多くの情報を舞台から得て頂けるように事前にお伝えする、マル秘レジュメ。
「詞章の抜粋」では、目にしておくことで舞台の言葉が聞き取れるように。
是非、ご一読ください。

～演目共通のみどころ

まず、客席にせり出した能舞台を眺めて、その日の色を想像してみてください。
柱と屋根で囲まれた立方体の舞台空間、この空間がこれから如何様に彩られていくのか。
いざ観能が始まれば、一演者に焦点を合わせることも、少し引いてパノラマの視野で眺めることも
お客様に委ねられ、限りなく自由に色彩を感じることが出来るはずです。

演者の舞台への登場は左(下手)^{しもて}と右(上手)^{かみて}から、
下手には五色の幕があり、陰陽五行説を意味していて、この世とあの世を区別するモノ・・・

当日の能では「通小町」は小野小町・深草少将の亡霊、「三井寺」は現在物ですが、
「舍利」では足疾鬼・韋駄天と神が登場します。

和装(紋付き袴)の者達はオーケストラピット(柱の外)の楽隊たる者達です。
作品中の登場人物ではありませんが、舞台の一部となって舞台を作り上げます。

それでは、作品のご紹介。

能「通小町」

修行僧(ワキ)のもとに、毎日木の実を供えに訪れてくる女(ツレ)に名を尋ねる。やがて僧が市原野へ行き、
供養していると、小町の霊と深草少将の霊(シテ)が現れ、百夜通いの様子を再現し、やがてともに成仏してゆく。

詞章の抜粋

～「木の実」と「好み」語呂遊び

「いつも来れる人か。今日は果の数々御物語り候へ 「拾ふ果は何々ぞ「古へ見なれし。車に似たるは嵐に
脆き落椎 「歌人の家の果には 「人丸の垣穂の柿。山の邊の小々栗 「窓の梅 「園の桃 「花の名にある
櫻麻の。苧生の浦梨なほも有り攪香全手葉椎。大小柑子金柑。あはれ昔の恋ひしきは花橘の一枝

車に似たるは嵐に脆き落椎は四位少将、人丸の垣穂の柿は柿本人麻呂をさし由来のある窓の梅から数々の
花を連ねつつ、椎(四位)をも連ねる。

この後、舞台上で後ろ向きに座る小町は、存在していないことを意味し、やがて僧が市原野へと赴きます。

～小町の物語

「かる不思議なる事こそ候はね。只今の女の名を委しく尋ねて候へば。小野とはいはじ薄生ひたる。市原野に
住む姥と申しかき消すやうに失せて候。こに思ひ合はする事の候。或人市原野を通りしに。薄一叢生ひたる蔭

よりも。秋風の吹くにつけてもあな目…。小野とはいはじ薄生ひけりとあり。これ小野の小町の歌なり。さては疑ふところもなく只今の女性は。小野の小町の幽霊と思ひ候ふ程に。かの市原野に行き。小町の跡を弔はゞやと思ひ候

～小町と少将の登場

「嬉しのお僧の弔ひやな。同じは戒授け給へお僧
「いや叶ふまじ戒授け給はゞ。怨み申すべし。はや帰り給へお僧

小町は弔いを喜び、少将は憂う。二人の間の想いのズレを表現します。

～小町一人の成仏を憂う少将と、自分だけでも願う小町

「二人見るだに悲しきに。御身一人佛道成らば我が思。重きが上の小夜衣。重ねて憂目を三瀬川に。沈み果てなばお僧の。授け給へるかひもあるまじはや帰り給へやお僧たち
「猶も其の身は迷ふとも。戒力に引かれれば。などか佛道成らざらんただ俱に戒を受け給へ
「ひとの心は白雲の。われは曇らじ心の月。いでてお僧に弔はれんと薄おし分け出でければ

～百夜通いの再現

「思ひもよらぬ車の榻に。百夜通へと詐りを。實とおもひ。暁毎に忍車の志に行けば 「車の物見もつましや。姿を変へよと云ひしかば 「輿車はいふに及ばず 「いつか思は 「やま城の木幡の里に馬はあれども
「君をおもへば徒跣 「さて其の姿は 「笠に蓑 「身の憂きよとや竹の杖 「月には行くも暗からず
「さて雪には 「袖をうち拂ひ 「さて雨の夜は 「目に見えぬ。鬼一口も恐ろしや 「たまひ曇らぬ時だにも
「身ひとりに降る。涙の雨か

小町が戯言で約束した「私のところに百日通ったらなびいてあげる」の言葉を信じ、少将は身分を隠し自らの足で小町のもとに通い詰めた。

「夕暮は。一かたならぬ。思かな 「月は待つらん月をばまつらん。我をば待たじ。空言や 「暁は。数々多き。思かな 「我が為ならば 地「鳥もよし啼け。鐘もただ鳴れ。夜も明けよ。唯獨寝ならば。辛からじ

夕暮れ、明け方、少将の想いと小町の想い、相違ゆえに成仏出来ない苦しみを意味します。やがて小町の為に飲酒戒を守るとの誓いによって、成仏がなされます。

狂言「墨塗」

田舎大名が、訴訟も無事に済み帰郷の前に在京中に親しくなった女のもとへ、召使いを伴って別れの挨拶に立ち寄る。暇乞いの事実を知らされた女は、別れを惜しんで泣き始めますが、その挙動に不審を感じた召使いは……。今も昔も変わらぬ男女の虚々実々の駆け引き、また召使いも見どころです。

能「三井寺」

～あらすじ

狂女物。子供に生き別れた女が清水寺に参籠し、夢の告げを受け三井寺で再会を果たす。

詞章の抜粋

～観音の衆生済度に我が子への想いを託す

シテ「南無や大慈大悲の観世音さしも草。さしも畏き誓の末。一稱一念なほ頼あり。
憐み給へ思ひ子の。行末何となりぬらん行末なになりぬらん 枯れたる木にだにも。花咲くべくはおのづから。
いまだ若木の緑子に。二度などか逢はざらん二たびなどか逢はざらん。

～三井寺にて中秋を愛でる一行

「秋も半の暮待ちて。秋もなかばの暮待ちて。月に心や急ぐらん

今夜は八月十五夜明月にて候程に。幼き人を伴ひ申し皆々講堂の庭に出でて月を眺めばやと存じ候

～長閑な近江の景色を眺めつつ、心は我が子への想いのみ

「雪ならば幾たび袖を拂はまし。花の吹雪と詠じけん志賀の山越うち過ぎて。眺の末はみづうみの。鳩照る比叡の山高み。上見ぬ鷺のお山とやらんを。今日の前に拜むことよ。あらありがたの御事や。かやうに心あり顔なれども。われは物に狂ふよのう。いや我ながらことわりなり。あの鳥類や畜類だにも。親子のあはれは知るぞかし。況してや人の親として。いとほしかなしと育てつる子の行くへをも白糸の 「乱れ心や狂ふらん

「都の秋を捨てゆかば 地「月見ぬ里に。住みや習へるとさこそ人の笑はめ。よし花も紅葉も。月も雪もふる里に。我が子のあるならば。田舎も住みよかるべしいざ古里に帰らんいざ古里にかへらん。帰ればさ波や志賀辛崎の一つ松。緑子のたくひならば松風にこと問はん。松風も。今は厭はじ櫻咲く。春ならば花園の。里をも早くすぎ間吹く。風冷ましき秋の水の。三井寺に着きにけり三井寺に早くつきにけり

「桂は生る三五の暮。名高き月にあこがれて。庭の木陰に休らへば 「げにい今宵は三五夜中の新月の色。二千里の外の故人の心。水の面に照る月なみを数ふれば。秋も最中夜も半。所からさへおもしろや。「月は山。風ぞ時雨ににほのうみ。風ぞ時雨に鳩の海。波も粟津の森見えて。海越しのかすかに向ふ影なれど月は真澄の鏡山。山田矢橋の渡舟の夜は通ふ人なくとも。月の誘はぶおのづから。舟もこがれて出づらん舟人もこがれ出づらん

能の狂いとは、一つの事に執着する事を意味して、多くは「狂ヒ笹」を持つことがその心理状態を表現しています。

この後、狂言が鐘を撞く様を、「えいえい、やっとな、じゃあ〜ん、も〜〜〜ん…」と表現します。

～鐘の音を生者必滅の真理で現し、変成男子の救いを尊む

初夜の鐘 諸行無常 後夜の鐘 是生滅法 晨朝の響 生滅滅已 入相は 寂滅為楽 五障の雲

～鐘に心を寄せ、鐘の故事が語りだされる

それ長楽の鐘の聲は。花の外に盡きぬ また龍池の柳の色は 雨の中に深し
言葉の林、高砂の尾上の鐘、初瀬、難波寺 名どころ多き。鐘の音 つきぬや法の声ならん

～鐘の静寂は狂女の心を現し、かすかに響く鐘の音は薄く残る希望として、または絶望として語られる。

山寺の春の夕暮来てみれば入相の鐘に。花ぞ散りける。げに惜めどもなど夢の春と暮れぬらん。そのほか暁の。妹背を惜むきぬいの。怨を添ふる行くへにも枕の鐘や響くらん。また待つ宵に。更けゆく鐘の声聞けば。飽かぬ別の鳥は。ものかはと詠ぜしも。恋路の便の音づれの声ときくものを。又は老らくの。寝覚ほど経る古へを。今思ひ寝の夢だにも。なみだ心の寂しさに。この鐘のつくいと。思を盡す暁をいつの時にか比べまし

「月落ち鳥啼いて 「霜天に満ちて冷ましく江村の漁火もほのかに半夜の鐘の響は。客の船にや通ふらん蓬窓雨滴りて馴れし夕路の楫枕。浮寝ぞかわる此の海は。波風も静にて。秋の夜すがら月澄む三井寺の鐘ぞさやけき

～親子の再会

「今は何をかつつむべき。われは駿河の國。清見が関の者なりしが。人商人の手に渡り。今此の寺にありながら。母上われを尋ね給ひて。かやうに狂ひ出で給ふとは。夢にもわれは知らぬなり
「この三井寺に廻り来て 「親子に逢ふは 「何故ぞ。此の鐘の声立て、物狂のあるぞとてお咎めありし故なれば。常の契には。別の鐘と厭ひしに。親子の為の契には。鐘ゆゑに逢ふ夜なり嬉しき鐘の声かな。かくて伴ひたち帰り。かくて伴ひ立帰り。親子の契つきせずも。富貴の家となりけり。げにありがたき考行の。威徳ぞめでたかりける威徳ぞめでたかりける

これまでの静寂を手のひらを返す様に三井寺の鐘に引き寄せられた縁によって親子再会の喜びで終曲します。

～仕舞とは能の一部を紋服姿にて、謡と舞いのみにて演じます。ストーリーよりも情感を楽しみます。

「賀茂」

上賀茂神社の別雷神による国土祝福の勇壮な舞。

「天鼓」

少年・天鼓が鼓に舞い戯れる軽やかな舞。

「芭蕉」

薬草喻品・草木国土悉皆成仏を軸に芭蕉の精が蕭々と風情を舞い現します。

能「舍利」

～ あらすじ

都を訪れた僧が泉涌寺に参り、十六羅漢像や仏牙舍利を拝観するところに仏の教えに引かれて来たという男を信じ、ともに舍利を拝する。暫くすると突然に空がかき曇り雷鳴が響いてき、足早に飛び回り舍利を奪い去る。僧が韋駄天に祈りを捧げ舍利は元に戻ります。

詞章の抜粋

～シテのつぶやき

「ありがたや佛在世の御時は。法の御声を耳に觸れ。聞法値遇の結縁に。一劫をも浮む此の身ながら。二世安楽の心を得るに。後五の時代の今更に。なほ執心の見佛の縁。嬉しかりける。時節かな

リアルタイムで釈迦の説法を受けていた自分だが、二千年以上たった今も佛にまつわる舍利を目の前にすることに感謝をしている。

～インド唐土日本へと仏教が伝来した証の舍利を崇める

「それ佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生もあり。善悪亦不二なるべし

「西天唐土日域に。時到つて久方の。月の都の山並に。佛法流布の志るしとて。佛骨を納め奉り

然るに。佛法東漸とて。三如来四菩薩も。皆日域に地を占めて。衆生を濟度志給へり。常在靈山の秋の空。

わづかに二月に臨んで魂を消し。泥おん雙樹の苔の庭遺跡を聞いて腸を断つありがたや佛舎利の。御寺ぞ在世なりける。げにや鷲の御山も。在世の砌にこそ草木も法の色を見せ。皆佛身を得たりしに

「今は寂しく冷ましき 「月ばかりこそ昔なれ。孤山の松の間には。よそい白毫の秋の月を禮すとか。蒼海の波の上に。僅に四諦の暁の雲を引く空の。寂しささぞな鷲の御山。それは上見ぬ方ぞかし。此處は正に目前の。佛舍利を拝する御寺ぞ貴かりける

これまでの静寂は仏法流布による平穏を現しています。

やがて本性を現した足疾鬼によって、舞台がガラリと動的に変化し、舍利を奪い去ってしまいます。

そして、韋駄天による足疾鬼の追従が始まります。

「欲界色界無色界。化天耶摩天他化自在天。三十三天攀ち登りて。帝釋天まで追ひ上ぐれば。梵王天より出で合ひ給ひて。もとの下界に。追つ下す

舞台狭しと駆け巡る二者は天上高く駆け上がる様子や地に転げ落ちていく様を意味します。

最後は散々な有り様で行方が知れなくなる足疾鬼となります。